

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区

小久白墳墓群

～サエ（サイ）ノカミ信仰遺跡の調査報告～

1999年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道9号のバイパスとして高規格道路安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当道路においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会の協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成10年度に実施した遺跡調査の成果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成11年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所
所長 大石龍太郎

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成4年度から一般国道9号安来道路建設予定地内（西地区）に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。

この報告書は、平成10年度に実施した小久白墳墓群の賽の神信仰に関する遺構の調査成果をまとめたものです。賽の神さんは村境に祀られる「道の神さん」ですが、出雲地方では「耳の神」として信仰されているところが多くみられます。調査した賽の神は、安来市久白町と荒鳥町の境にあり、北に中海を見下ろし、東には秀峰大山を望むことが出来る大変眺望の佳い丘陵の上に祀られています。石を積み上げて造った施設のまわりからは、供御されたカワラケや古銭などが見つかっており、賽の神信仰の実態を具体的に知ることができました。また、賽の神の下からは、さらに古い時代の道の跡も見つかっています。

本報告書が、私たちの身近にある文化財や地域の歴史に触れる契機に、いささかともなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご協力いただきました地元の方々をはじめ、建設省松江国道工事事務所、安来市教育委員会ならびに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

島根県教育委員会

教育長 江口博晴

例　　言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成10年度に実施した、一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財調査の報告書である。

2. 発掘調査を行った遺跡と地番は次の通りである。

小久白墳墓群 安来市荒島町3086-1

3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 島根県教育委員会〔1998(平成10)年度〕

事務局 島根県教育厅文化財課 勝部 昭(課長)、島地徳郎(課長補佐)

埋蔵文化財調査センター 宍道正作(センター長)、秋山 実(課長補佐)、
川崎 崇(企画調整係主事)

調査員 足立克己(調査第3係係長)、間野大丞(同主事)、月坂雄一(臨時職員)

整理作業員 佐々木順子、田中路子、羽島ひとみ、三上恭子、渡部恵子

4. 発掘作業(発掘作業員雇用等)については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、(社)中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から(社)中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人 中国建設弘済会島根支部 布村幹夫(現場事務所長)、大野紀昭(技術員)

作業員 青戸英雄、安部国子、佐藤利枝、野津清子、野津 潔、野津林子、野津安江、
口向輝雄、森山和子、若槻頑英、田村品吉

5. 本書の執筆、作成は間野、月坂が担当した。なお出土遺物の実測は月坂が、写真撮影は間野が行った。また小久白墳墓群第2章は浅沼政志(教育厅文化課古代文化センター)が執筆した。

6. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真是島根県埋蔵文化財調査センター(松江市打出町33)で保管している。

7. なお、平成8年度に調査を実施した、一般国道9号松江道路建設予定地内遺跡の布志名焼窯跡群の調査報告をあわせて掲載している。

凡　　例

1. 遺跡位置図(図1)は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

2. 掘図中の方位は国土調査法による第III座標系X軸の方向を指す。従って、磁北より7°12'、
真北より0°32'東の方向を指す。

3. 掘図の高度値は海拔高である。

4. 掘図の縮尺は図中に明示した。

本文目次

1.はじめに	1
2.山陰のサエ（サノ）ノカミ信仰の概要	2
3.小久白墳墓群と周辺の遺跡	3
4.検出した遺構と遺物	3
5.おわりに	19

挿図目次

小久白墳墓群

図1 遺跡の位置と近世の街道	1
図2 小久白墳墓群・柳II遺跡・神庭谷遺跡周辺地形図	4
図3 調査前地形測量図	5
図4 石積遺構立面図	6
図5 石積遺構実測図	7~8
図6 石積遺構遺物出土状況実測図	9~10
図7 石積遺構断面図・遺物垂直分布図	11~12
図8 カワラケ出土状況実測図	13
図9 石積遺構出土遺物実測図	14
図10 石積出土錢貨拓影	16
図11 調査終了後地形測量図	18
図12 道路遺構断面図	18



1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

小久白墳墓群は島根県安来市荒島町3086-1に所在する遺跡である。一般国道9号安来道路建設予定地内遺跡のうち西地区（安来市荒島町～東出雲町出雲郷）については、平成4年度より発掘調査に着手しており、その結果は11冊の報告書にまとめられている。本遺跡についても平成7年度に調査が行われ、翌年には報告書も刊行されている。⁽¹⁾今回対象となったサエ（サイ）ノカミ信仰に関わる部分については、平成7年度調査時には用地買収が未了であったため、調査を実施することができなかった。その後、平成9年度に用地買収が完了したことにより、翌10年度に調査を実施するに至った。

(2) 調査の経過

遺跡は標高約75mを頂点とする丘陵が北に向けて二股に延びる、その付け根に位置している。丘陵上からは、北に中海、島根半島を東には秀峰大山を一望できる非常に眺望の良い立地といえる（図1）。調査は平成10年4月20日より着手し5月28日に終了した。遺構はサイノカミ信仰に関わるもので塚状の石積施設が築かれていた。この石積みの写真測量から着手し、その後石積みを除去しながら、奉賽物と思われるカワラケと古銭の取上げを行っていった。総ての石積みを取り除くと、直下から地山を切り通した道路遺構が新たに検出された。この道路遺構の続きは南西の谷筋でも部分的に確認することができた。

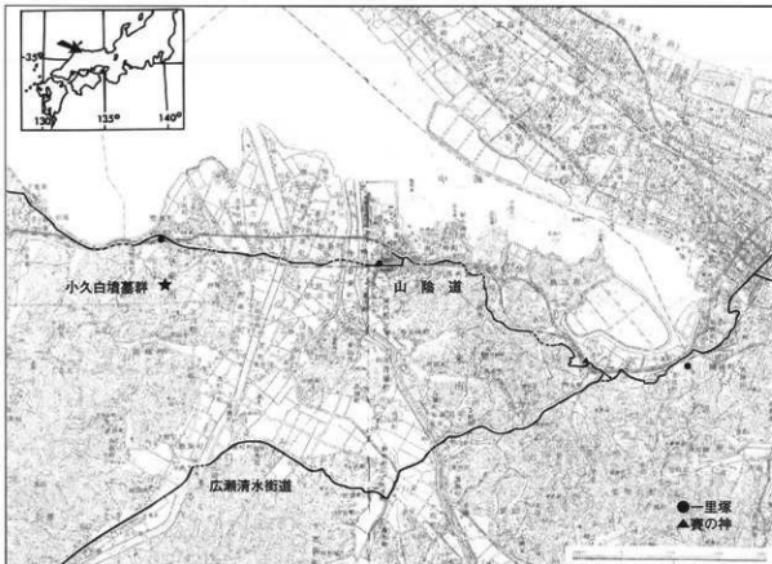


図1 遺跡の位置と近世の街道 (S=1:100,000)

2. 山陰のサエ（サイ）ノカミ信仰の概要

山陰地域を含め一般的にはサエノカミあるいはサイノカミと呼ばれ、「寒神」「才神」「幸神」などと書かれるが、信州を中心とした一帯では道祖神（ドウソジン）、関東地方ではドウロクジンといわれ、全国的に広く見られる信仰となっている。

一般的に村境、峠、辻などの境界に祀られることから、境を守る神として外部からの疫病や災害を防ぎ、逆に外へ出る者には道中の安全を守ってくれると信じられており、文献にも『日本書紀』に來名戸之祖神（クナトノサエノカミ）が、また『和名類聚鈔』には佐部乃加美（サエノカミ）がみられ、境界神や行路の神であったことをうかがうことができる。加えて、神道や仏教、陰陽道など様々な宗教や信仰の影響を受けたとみられ、夫婦和合や縁結び、子どもの神など複雑で多様な信仰内容を持っている。

この山陰地域では、全般的に耳の病の神という信仰が広く見られる。耳の通りが良くなるよう、碗やザザエに穴を開けたものや、穴のあいた貨幣を供えることが一般的であるが、加えて地域によって多様な信仰内容が加わり、違いが見られる。

鳥取県東部の因幡一帯では、サエノカミは神木と石像が多く、わらじ草履などが奉賽され、足の神、旅行安全の神としての信仰が多い。変わったところでは縁切りの伝承が見られる。縁切りとは逆に夫婦の縁ということになると、伯耆から島根県の出雲東部にかけては、縁結びの神としての信仰が多い。特に伯耆一帯では男女双対の石像が多く、藁で作った馬に炭や団子を乗せて奉賽するが、その時、藁馬の尻尾を少し焦がして木に投げ上げ、高い枝に引っかかれば良縁があり、逆に引っかかるないと縁起が悪いなどといわれる。また、安来あたりでは仲人のことをサエノカミというなど、縁結びの神としての信仰が深いことを裏付けている。さらに、今回の発掘調査では多くの小石が出土していたが、これを奉賽することについては、淀江町では良縁を祈願するために供えたり、広瀬町などでは石投げ神さんだといわれていたり、隠岐の島前では小石を積めば死んだ子どもが浮かび



双対像のサエノカミ

上がるといわれるなど様々である。隠岐ではサエノカミは子育ての神として信仰され、子どもが病気になると紙に馬の絵を書いて参ったり、生まれた子を連れて参って、初めて通りかかった人に名前をつけてもらようなことがある。

このサエノカミも、道路改修や、医療技術の発達により、地域から忘れられつつある。

(古代文化センター 浅沼政誌)

参考文献

- 川村邦光「道祖神」「神道事典」P.91、弘文堂、1994
- 倉石忠彦「道祖神」「日本民俗宗教辞典」PP418-420、東京堂出版、1998
- 山陰民俗学会「山陰民俗第54号」1990
- 山陰民俗学会「山陰の祭祀伝承」1997
- 島根県教育委員会「隠岐島の民俗」1973
- 森納「寒神考—因伯のサイノカミと各地の道祖神」1990
- 八雲村教育委員会「八雲村の祭祀習俗」1981

3. 小久白墳墓群と周辺の遺跡（図2・3）

小久白墳墓群と周辺の柳II遺跡、神庭谷遺跡は平成7年度に調査が行われ、平成8年度に報告書も刊行されている。各遺跡の概要を見てみたい。小久白墳墓群I区では弥生時代後期末の長方形墳丘墓と土壙墓2基が検出され、当遺跡が荒島墳墓群の一角を占めるものとして位置付けられた。柳II遺跡では弥生時代後期末と古墳時代中期後半の集落址の一角を検出したほか、弥生時代前期の土器棺墓、8世紀末の道路遺構が確認されている。また、底部穿孔された近世の土師器と古銭が出土していることは、本遺跡との関係からも注目される。神庭谷遺跡では弥生時代中期・後期末、7～9世紀の須恵器を含む包含層の存在を確認している。

4. 検出した遺構と遺物

サエ（サイ）ノ神を構成する石積遺構と、それより古い時期の道路遺構について概要を記述する。

(1) サエ（サイ）ノカミ信仰に関わる遺構と遺物

石積遺構（図4・5）

石積遺構は標高65mの尾根の最高所から尾根づたいに東南方向に下降した、標高62m地点に位置している。遺構は当初尾根の先端を覆うようにマウンド状に積み上げられていたものと思われるが、調査時にはその多くが南西の谷筋に流出していた。北側斜面にも石がほとんど見られず、これも北東谷筋に向けて流出したためと考えられる。当初の形状は断面観察と石積の基底面に施された盛り土により確認できる。規模は東西3.8m、南北6.74mで尾根の鞍部に合わせるように稍円形を呈していたものと推定される。石積は道路遺構の底面から頂部までの高さで1.0mである。しかし当初は20cmほど低かったことが断面観察で確認できた。これはサイノカミに石を奉賽物として供えたためであろう。永い年月をかけて徐々に上に石が積み上げられ、現在の形状になったものと思われる。また石の崩落などによりその都度手が加えられたようである。石積遺構の西側の石垣は、石の下からカワラケが出土することから、後に積み直されたことが分かる。石垣西側の平坦面には一辺1.5mの方形の範囲に石敷が見られるが、これも崩落した石を利用して後世に付設されたのであろう。

このほか石積遺構の東には東西1.6m、南北1.4m、高さ30cmの方形の石組遺構が築かれていた。この石組は基本的に石を2段に積み、縁にやや大きめの石を据えている。この石組遺構の周辺からはカワラケが、直下からは陶器1点、磁器1点が出上している。この石組が石積遺構とともに、当初から築かれていたものかは判然としない。しかし、二つの遺構の間にも散発的な状況ではあるが石が置かれていることから、両遺構をもってサイノカミを構成していた時期もあったものと思われる。

遺物の出土状況（図6～8）

サイノカミさんへの奉賽物としてはカワラケと古銭がある。カワラケの出土状況を見てみると大きく分けて3つのまとまりがある。（a）石組遺構の西側に括して供えられているもの（図

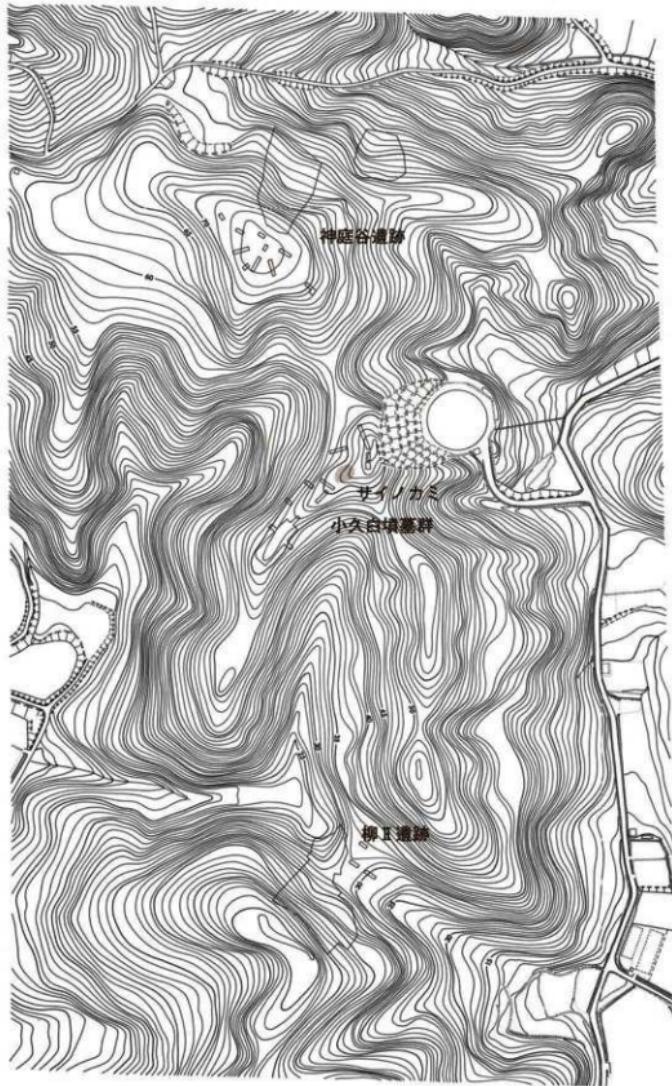


図2 小久白墳墓群・柳II遺跡・神庭谷遺跡周辺地形図 (S=1/3000)



図3 調査前地形測量図 (S=1/600)

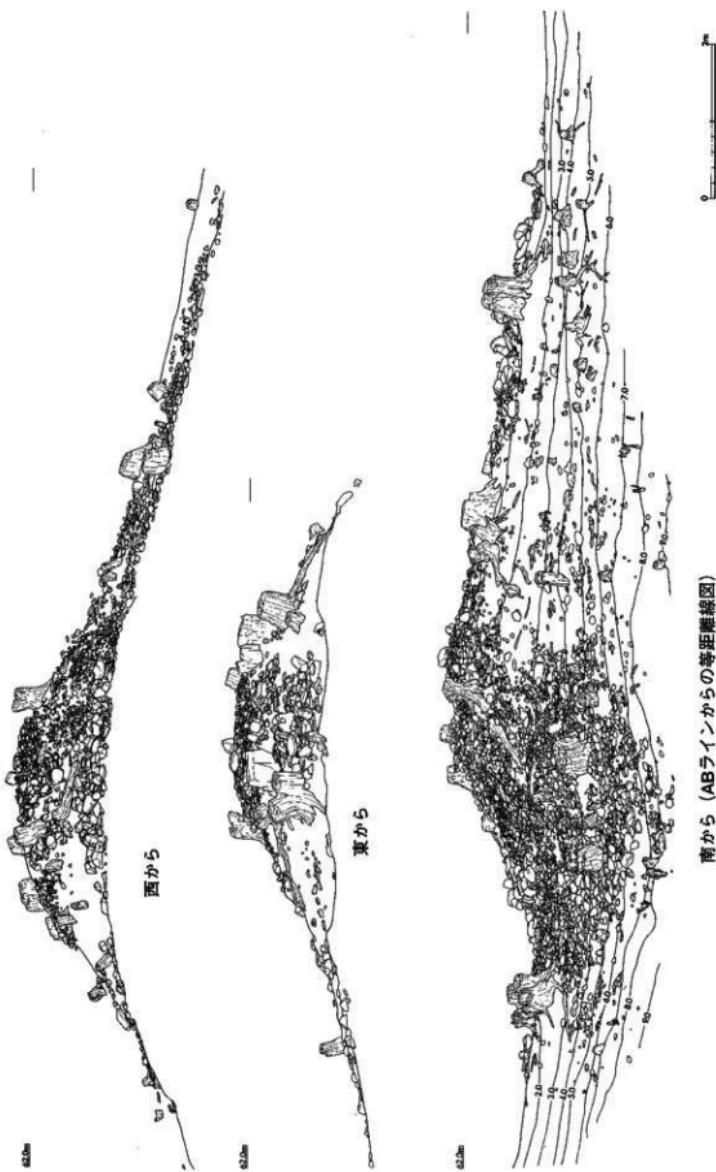


図4 石積造構立面図 ($S=1/60$)

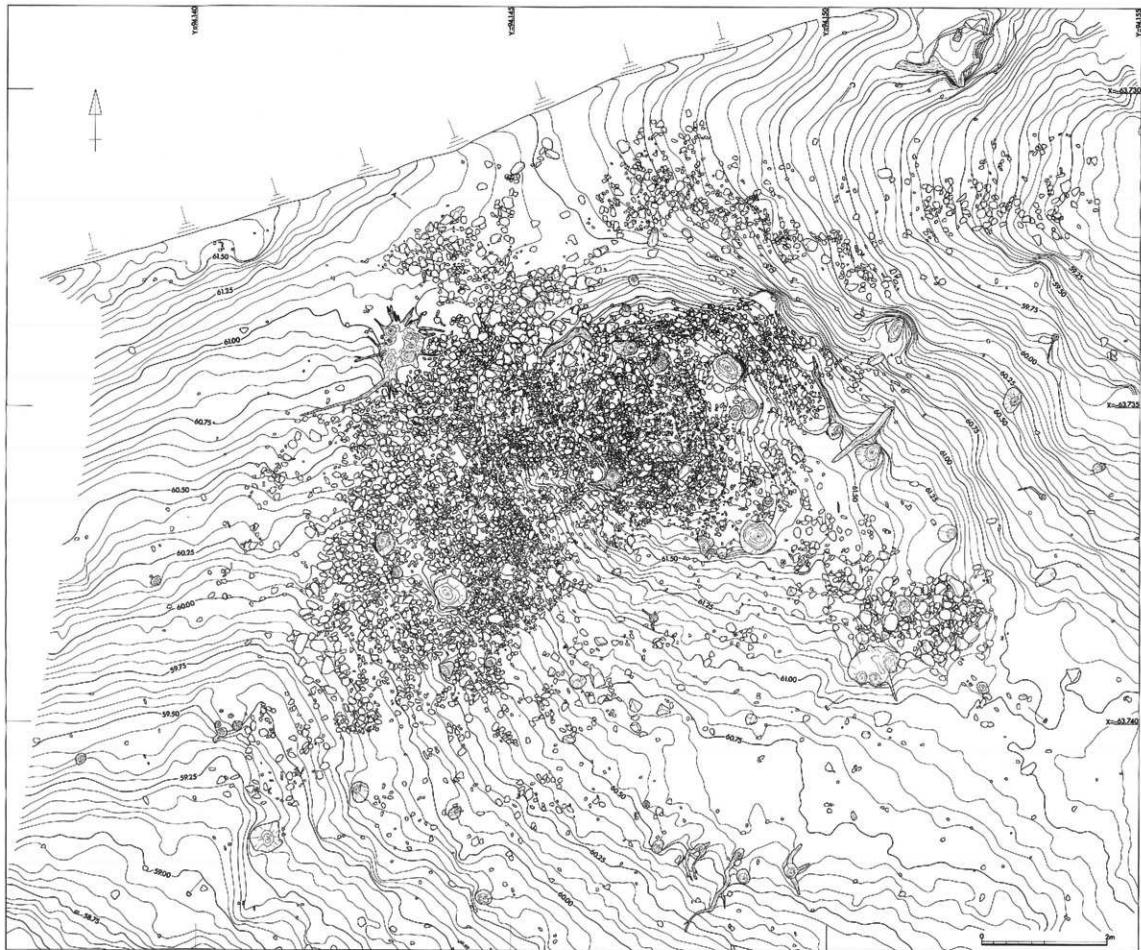


図5 石積造構実測図 ($S=1/80$ 、5 cm センター)

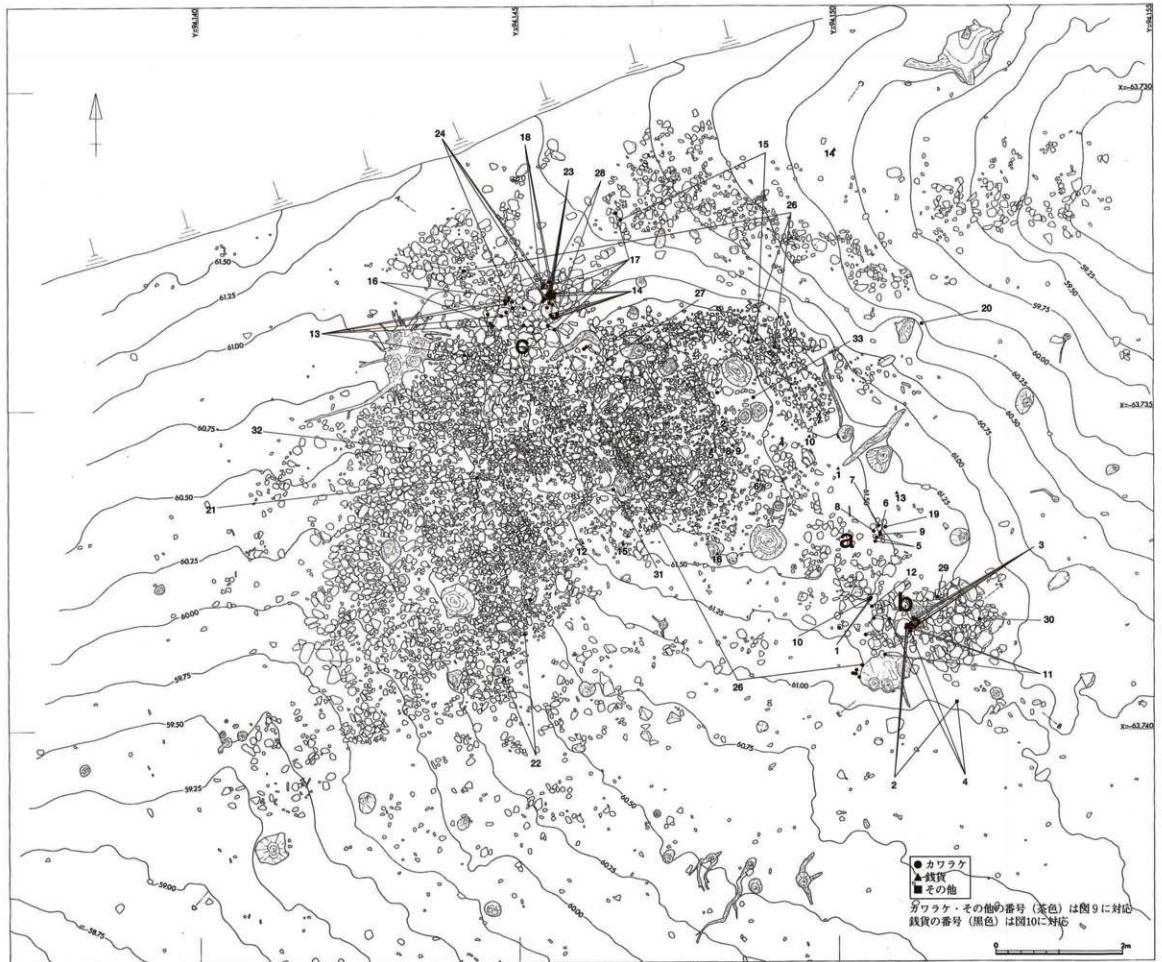
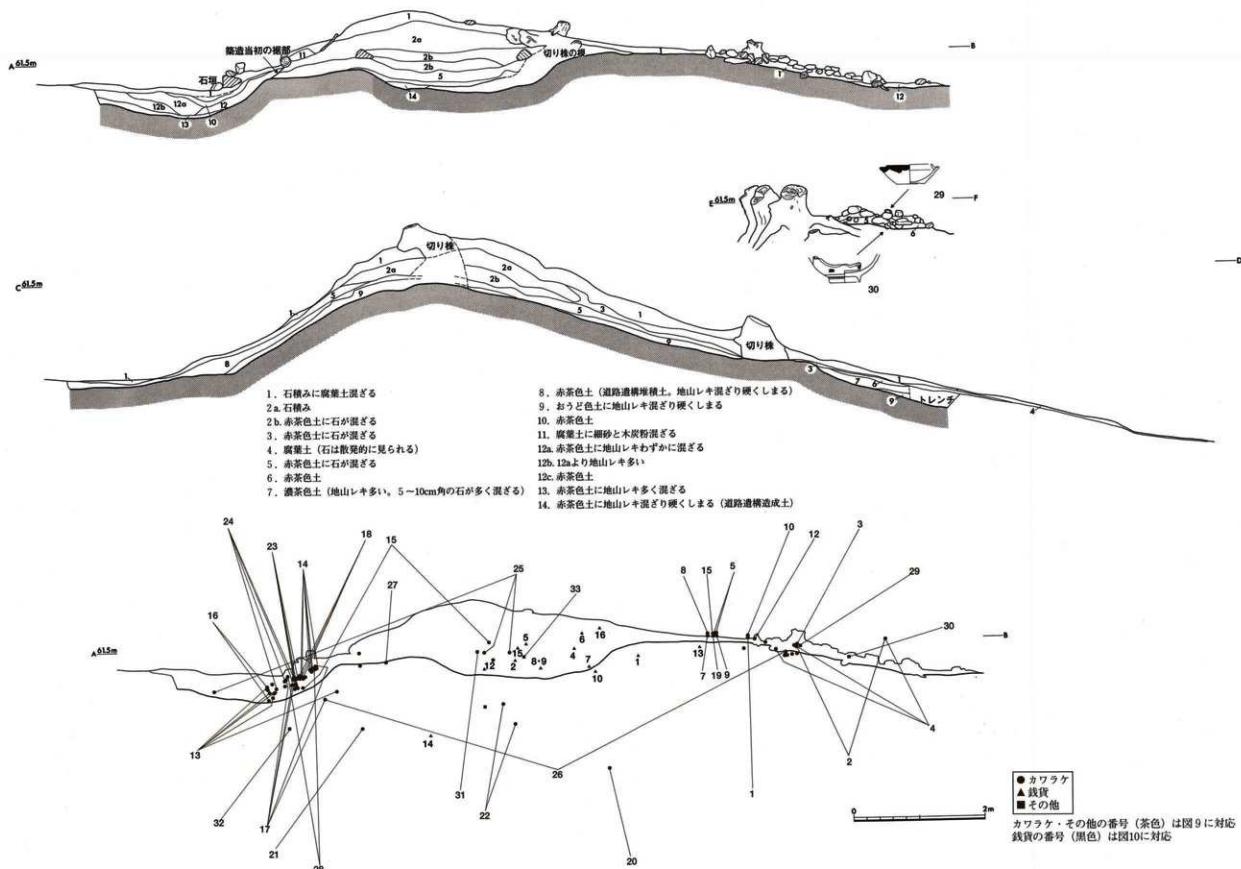


図6 石積造構造物出土状況実測図 (S=1/60、25cmセンター)



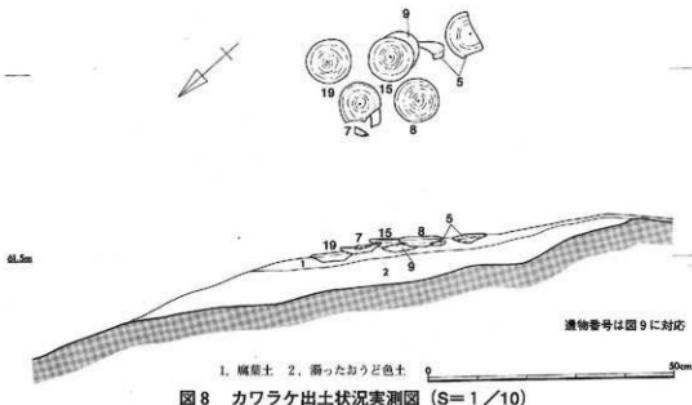


図8 カワラケ出土状況実測図 (S=1/10)

6の5～9)と、(b)南側の榎の木の周辺にまとめられているもの(同2・3他)、(c)石積遺構の西側部の一群(同18・23他)である。その他は遺構周辺に散発的に認められ、特にまとまりは認識できない。奉賽物という性格や前項の遺構の形成過程も合わせれば、二次的に動かされていることも当然考慮しなければならない。ただ、いずれにせよ、ある時期の祈念が行われた場所や、道がどこを通っていたかを示す手がかりにはなろう。aについては特定できないが、bは榎の木と石組遺構を意識して置かれたものであろう。cは石積遺構の遺構の斜面ないし裾部に置かれたものであろうが、石の崩落等により細片化していた。そのほかのカワラケ、銭貨とも石積み内に混じって出土しており、前述した石積みの構築過程を裏付けている。銭貨のうち五円硬貨は北北東側の道部分で出土しており、お供えしたものかは断定できない。また平成4年の百円硬貨は伐採された木の幹の辺りに置かれていた。平成7年度の調査時に置かれたものかもしれないが定かではない。

石積遺構と道の位置関係(図6)

石積遺構が築かれ、サイノカミさんが祭られていたころ道がどこを通っていたのか。現在の地形と発掘調査の知見から、北北東から南へ尾根筋を横断するルートを考えられる。北北東の谷筋には石積遺構から崩落した石が多数見られる。なかには地山面に喰い込むようなものもあるが、自然に踏石としての機能をもつようになったのかもしれない。

遺物

奉賽物と考えられるカワラケ、古銭、陶磁器のほか須恵器、土製支脚が出土した。

カワラケ(図9)

いずれも焼成後に底部穿孔したもの(布志名才の神分類のI類)⁽²⁾であり、耳の治癒を祈願したものと考えられる。孔の大きさは径2～3mmと近い数値を示す。ただし21は孔が二つ連結した形になっている。錐などによる回転運動を利用したようであり、非常に丁寧に穿孔されている。以

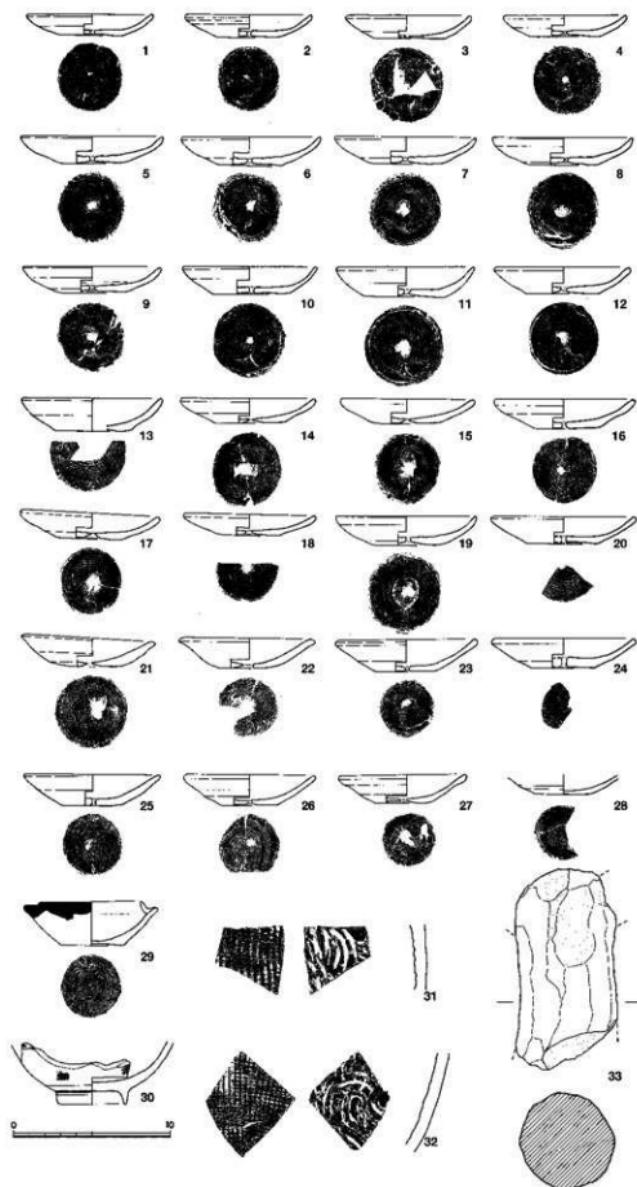


図9 石積遺構出土遺物実測図 (S=1/3)

小久白墳墓群 カワラケ計測表

擇図番号	口径	底径	器高	底部穿孔等・種類	底部調整	色調	備考
1	8.1	4.1	1.3	II	A	白色	
2	8.1	3.9	1.5	II	A	白色	
3	7.9	4.5	1.4	II	A	白色	
4	7.8	4.3	1.4	II	A	白色	
5	9.1	4.0	1.8	II	A	肌色	
6	8.9	4.1	1.9	II	A	肌色	
7	9.0	4.5	1.7	II	A	肌色	
8	8.9	4.5	1.8	II	A	肌色	
9	8.8	4.2	2.2	II	A	肌色	
10	8.5	4.8	1.7	II	A	肌色	
11	8.7	5.1	1.9	II	A	肌色	
12	8.7	4.6	1.7	II	A	肌色	
13	8.9	4.8	1.6	?	A	肌色	
14	8.6	4.5	1.6	II	A	橙色	
15	8.6	4.1	1.6	II	A	橙色	
16	9.0	4.0	1.9	II	A	橙色	
17	8.8	4.1	1.7	II	A	橙色	
18	8.4	3.9	1.4	II	A	橙色	
19	9.0	4.1	1.9	II	A	橙色	
20	9.2	4.6	1.7	II	A	肌色	
21	8.5	3.8	1.9	II	A	橙色	
22	8.7	3.2	1.9	II	A	(肌) 橙	
23	9.0	3.8	2.1	II	A	橙色	
24	9.1	4.1	1.9	II	A	橙色	
25	8.7	3.7	2.0	II	A	橙色	
26	8.3	3.7	2.0	II	A	肌色	
27	8.1	3.4	1.8	II	A	橙色	
28		3.7	(1.3)	?	A	橙色	

(凡例)

底部穿孔
底部調整I類 焼成前穿孔
A 回転糸切りB₁ " "
B₂ "

II類 焼成後穿孔

削り調整
回転ナデ調整

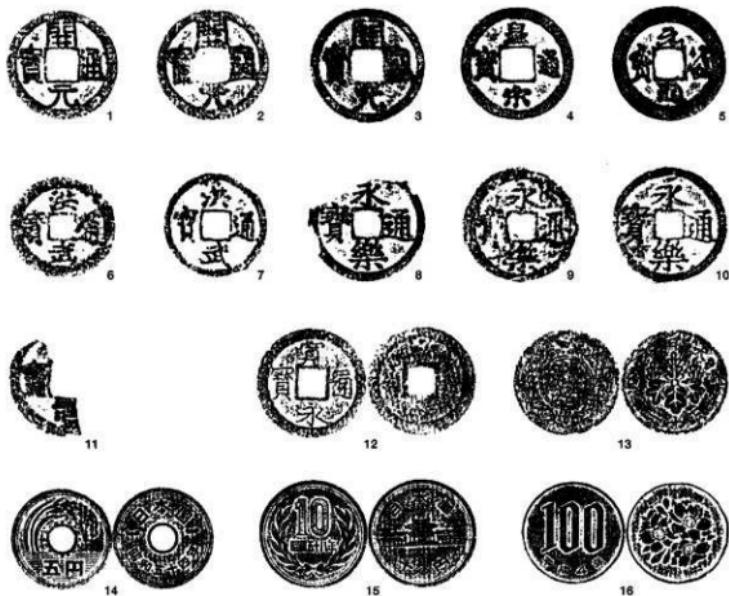


図10 石積造構出土銭貨拓影（実物大）

番号	名称	初鑄年	外径(A)/錢徑(B)(mm)	内径(C)/内径(D)(mm)	錢厚(mm)	量目(g)		
1	開元通寶	621	24.00	23.96	19.35	19.32	0.75~0.80	2.37
2	開元通寶	621	24.15	24.10	20.23	19.81	0.61~0.81	2.14
3	開元通寶	621	24.61	24.61	21.19	21.34	0.92~1.09	3.07
4	皇宋通寶	1038	24.25	24.23	20.21	19.72	0.98~1.05	3.11
5	元豐通寶	1078	24.63	24.70	18.25	19.08	0.65~0.75	2.42
6	洪武通寶	1368	22.50	22.75	17.25	17.75	1.30~1.35	3.36
7	洪武通寶	1368	22.65	22.65	18.92	19.38	1.39~1.63	2.90
8	永樂通寶	1408	—	—	—	—	0.99~1.00	(1.51)
9	永樂通寶	1408	24.70	24.78	20.45	20.71	0.95~1.21	2.61
10	永樂通寶	1408	24.68	24.70	21.25	21.33	0.95~1.13	2.76
11	—	—	—	—	—	—	1.09~1.19	(1.13)
12	寛永通寶	1697	23.62	23.68	18.75	19.25	0.82~0.89	2.22

参考文献

永井久美男「中世の山十銭・出土銭の調査と分類」兵庫県藏銭調査会1994

表は同書の「8. 古銭の計測」(9~10頁)を、もとに作成している。

下色調と形態に着目し5つに分類する。

I類 1～4が該当する。白色を呈するもので丁寧なナデで仕上げており、穿孔もきれいである。底部から体部にかけては円みのある立ち上がりである。

II類 肌色を呈するもので、形態から二つに細分できる。

II a類 5～9が該当する。底部と体部の境あたりをナデにより少し屈曲させる。内面には渦巻状にロクロ痕を残す。口縁端部は内面を上方に向けて薄く引き出しシャープに仕上げている。

II b類 10～13が該当する。底部と体部の境は明瞭である。口縁端部は円く仕上げている。

III類 14～18が該当する。赤肌色を呈し粗い砂粒が混ざるもの。穿孔も雑で周縁部が壊れ、いびつな形状となっている。体部中ほどで屈曲し外反して口縁端部に至る。口縁端部は肥厚している。

IV類 21～25が該当する。底部と体部の境が明瞭でなく、体部は円みがあるもの。底部から口縁端部に向けて器内が厚くなり、口縁端部は面をもつ。

このほか、19は他に較べて人形品である。20はIII類に近い形態である。26と27は体部中ほどで屈曲し稜線をもつ。27は口縁端部が外方に折れ肥厚している。26は肌～白色、27は赤肌色を呈している。

カワラケの所産年代は明確にし得ないが、他遺跡に類例を求めれば、松江市袋尻D遺跡が挙げられる。⁽³⁾ 同遺跡では焼成前に穿孔されたカワラケを副葬した古墓が1基調査されている。古墓S X01からは他に新寛永通寶5枚、ハサミが出土している。また同遺跡の包含層からは陶胎染付の椀と一緒にカワラケが出土している。カワラケは底部穿孔の有るものと無いものがある。以上の点から、本遺跡のカワラケの所産年代を18世紀を中心とする江戸時代後半と考えたい。

陶磁器（図9）

南側に付設されている石組の直下から陶器（29）と磁器（30）が出土している。29は受け皿状のもの。胎土は茶色で、内面と外面の口縁端部にかけて焦茶色の釉薬がかかる。布志名焼か。30は高台を有する椀で、内面見込みに胎上目を有し、外面には染付けを施す。所産年代は江戸時代後半か。

その他（図9）

石積み構造の盛り土直上から土製支脚（33）と須恵器1点（31）が、南西谷筋の堆積土中から須恵器1点（32）が出土している。須恵器は2点とも甕の胴部破片と思われる。

銭貨（図10）

全部で16枚出土している。内訳は本邦銭5枚と中国銭ないしは、その模鋳銭の可能性のあるもの11枚である。中国銭は開元通寶（唐621年初鋳）3枚、皇宋通寶（北宋1038年）1枚、元豐通寶（北宋1078年初鋳）1枚、洪武通寶（明1368年初鋳）2枚、永樂通寶（明1408年初鋳）3枚、不明1枚である。本邦銭は新寛永通寶（1697年初鋳）1枚のほかは近代以降の銭貨であった。近代以降の貨幣は大正11年の一錢が最も古く、昭和54年の五円硬貨、昭和58年の十円硬貨、平成4

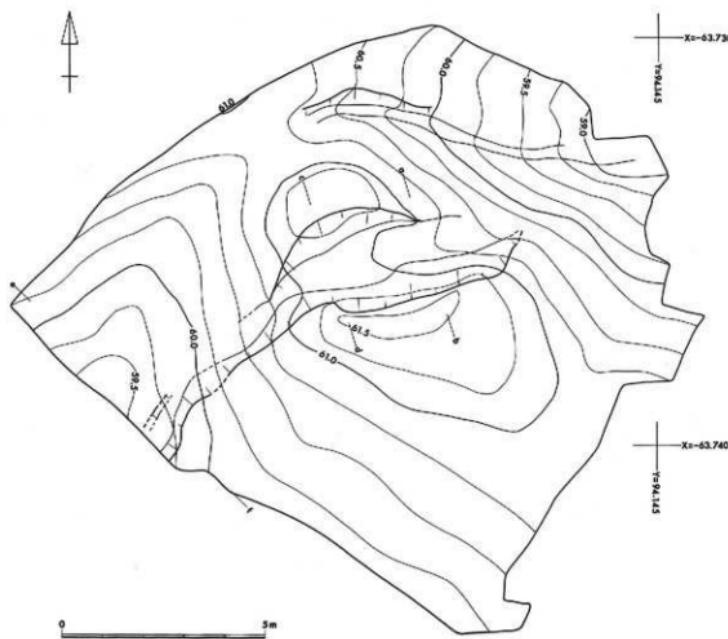
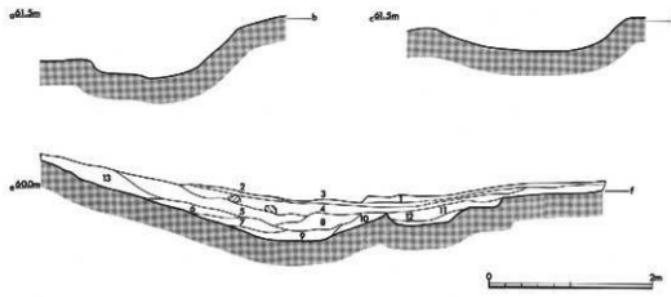


図11 調査終了後地形測量図 (S=1/120、25cmセンター)



- | | |
|----------------------|------------------------------------|
| 1. 石と腐葉土混ざる | 8. 赤茶色土 |
| 2. 腐葉土と赤茶色土混ざる | 9. 明おうど色土 (5cm角大の石が多く混ざる) |
| 3. 1に赤茶色土混ざる | 10. 濁赤茶色土 (地山レキ多く混ざり硬くしまる) |
| 4. 赤茶色土 (本の根多い) | 11. 酒赤茶色土 (地山レキ多い。5~10cm角の石が多く混ざる) |
| 5. 赤茶色土に3cm角の地山レキ混ざる | 12. 赤茶色土 (道路邊縁堆積土。地山レキ混ざり硬くしまる) |
| 6. より暗い | 13. 赤茶色土 (バサバサしたしまりのない土) |
| 7. おうど色土 (粘性あり) | 14. より粘性強い |

図12 道路邊縁断面図 (S=1/60)

年の百円硬貨まである。明治、大正、昭和、平成と連綿と続く状況はない。祭祀が断絶していた時代もあったのではないか。

(2) 道路遺構

構造 (図11・12)

丘陵先端部を北東から南西に横断するように切り通したものである。断面U字形をなし、規模は上面で幅1.84~2.34m、基底面で1.0m前後。上面から基底面までの深さは最も深いところで74cmである。尾根上から東側については不明だが、南西の谷筋では部分的に遺構を確認できた。谷部分では、谷筋からわずかに東側の斜面を断面U字形に成形している。規模は上面で1.0m前後、基底面で50cm前後、深さは40cmである。道路遺構底面には、地山レキの混ざったおうど色土が、非常に硬くしまった状態で堆積している。この土層に見られる握りこぶし大から人頭大の石は地山に喰いこんでおり、かなり強く踏み固められたことが考えられる。遺構に伴う出土品はない。

時期

遺構に伴う遺物は出土していないが、尾根を切り通すという構造から考えて古代にまで遡る可能性も考えられる。

5. おわりに

(1) サイノカミについて

今回の調査で、サイノカミ信仰に関連する遺構、遺物を考古学的に調査することができた。調査の結果をまとめると次の通りである。

- ①サイノカミさんは石積みを施設としている。
- ②奉賽物として石を積み上げている。
- ③構築後、改修をされながら、永い年月を経て現在の形状になった。
- ④奉賽物は底部穿孔されたカワラケと錢貨を中心としていることから、耳の神さんとして信仰されていた。
- ⑤石積遺構の築造時期は江戸時代後半と考えられる。

島根県内では同様の遺跡の調査は松江市勝負谷遺跡、玉湯町布志名才の神遺跡につづいて3例目である。⁽⁴⁾ いずれの遺跡も石積みを施設とし、底部穿孔されたカワラケと占銭などが供えられている。サイノカミさんは出雲地方の多くの地域で耳の神さんとして信仰されていることが民俗学のフィールドワークで指摘されている(第2章参照)が今回の調査結果もこれを裏付けたものといえる。他の2遺跡との比較でいえば、奉賽物が質量とも貧弱な感は否めない。立地も影響しているのであろうか。今後は、カワラケなどの出土遺物の年代的位置付けについて、更に検討を加える必要がある。

(2) 道路遺構について

本遺跡ではサイノカミさんの直下から、尾根筋を横断する形で切り通した道路遺構を検出した。時期は明確でないが古代にまで遡る可能性も考えられる。いま一つ興味深い点は勝負谷遺跡、布志名才の神遺跡でもサイノカミ直下で古代の道路遺構が検出されていることである。サイノカミ信仰が、いつまで遡るものであるかは不明であるが、サイノカミの成り立ちを考えるうえで興味深い。

(3) 柳Ⅱ遺跡との関係

本遺跡から250~300m離れた東の丘陵斜面に位置する柳Ⅱ遺跡1~3区でも底部穿孔されたカワラケが出土している。出土したのは丘陵斜面の下方の辺りで地滑りによる堆積土中からである。土師器は底部から体部にかけてのもので、底部は回転糸切りである。穿孔は焼成後になされており、大きさは径0.6cmとサイノカミの資料より大きい。当遺跡のカワラケより古い段階のようである。カワラケと一緒に銭貨も出土している。銭貨は明錢の宣徳通寶(1433年初鋤)、北宋錢の皇宋通寶(1038年初鋤)の二枚である。遺物と直接的に結びつく遺構はない。ただ、サイノカミと近い地点でこうした遺物が出土していることは、道路遺構の存在ともあいまって興味深いものといえよう。

以上、本遺跡で検出したサイノカミ信仰に関わる遺構と更に古い時代の道路遺構について、二三検討を行った。本遺跡の調査はあくまで点としての調査に過ぎないものである。急速な開発と人々の生活の変化などにより、古道や信仰のあとは、草木に埋もれるばかりとなっている。地域に根ざした地道な調査研究を続けていくことが古代~現代の道路の変遷や周辺の景観を知る上で欠かせないものといえるだろう。

- 註 (1) 島根県教育委員会「柳Ⅱ遺跡・小久白墳墓群・神庭谷遺跡 一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財報告書Ⅳ」1996
- (2) 島根県教育委員会「布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡」1997
- (3) 松江市教育委員会(財)松江市教育文化振興事業団「第2卸商業用地造成工事に伴う袋尻遺跡群発掘調査報告書」1998
- (4) 財團法人松江市教育文化振興事業団「財團法人埋蔵文化財調査年報Ⅰ」1997
- (5) 島根県教育委員会「布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡」1997
- (6) 宍道町の山陰道遺跡の溝蓋でも粟の神と伝えられる塚状の遺構が確認されている。石積は存在せず、奉養物は1697年初鋤の新寛永通寶が1枚出土したのみである。宍道町教育委員会、木下誠氏にご教示頂いた。
- 宍道町教育委員会「山陰道遺跡〔宍道・佐々木布下-萩田〕発掘調査報告」「宍道町歴史叢書」2 1998

参考文献

- (1) 宍道町教育委員会「宍道町歴史叢書2 歴史の道研究(1)」1998
- (2) 島根県教育委員会「島根県歴史の道調査報告書第1集 山陰道I(伯耆街道)広瀬清水街道」1995
- (3) 門脇等玄「旅路はるかる~道の歴史物語~」1998

図版1 (小久白墳墓群)





西から見たサイノカミさん



道路遺構（西から）



調査風景



西から見た
サイノカミさん



南東から見た
サイノカミさん



南から見た
サイノカミさん



カワラケ
出土状況



陶磁器出土
状況



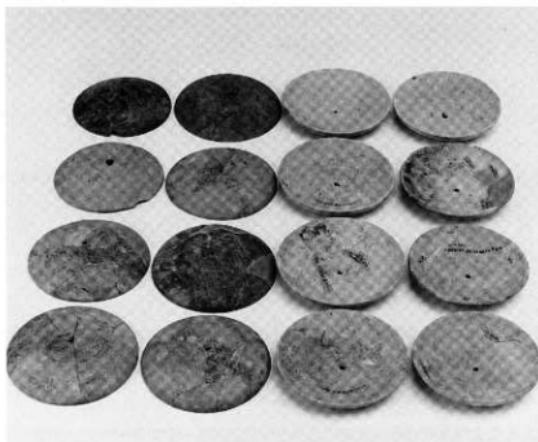
南から見た
サイノカミさん
(石積除去後)



石積・道路遺
構断面



石積道路遺構
断面



カワラケ

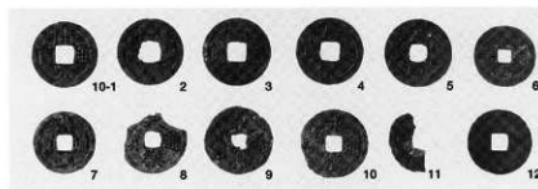


9-29



9-30

陶磁器



錢貨

付 錄

布志名焼窯跡群

本文 目 次

1.	調査に至る経緯と経過	23
2.	位置と環境	24
3.	調査の概要	
	(1) I 区	25
	(2) II 区	38
4.	終わりに	38

挿 図 目 次

第1図	布志名焼窯跡群と周辺の遺跡	23
第2図	若山周辺と調査区の位置	24
第3図	明治末期の布志名焼各窯元（『出雲の陶窯』から複製）	25
第4図	I 区 1・2 号窯跡および倒焰式窯跡平面図	26
第5図	I 区 1・2 号窯跡正面立面図および 1 号窯跡西窓壁外面立面図	27
第6図	I 区 4 号窯跡実測図	28
第7図	I 区下層窯跡実測図	29~30
第8図	I 区 1 号窯跡・東作業場および窯内出土陶器	31
第9図	I 区 1 号窯跡・西作業場および西作業場内出土陶器類（15~19が壁内出土）	32
第10図	I 区 5・6 号窯跡埋め土出土陶器類（1~12：5 号埋め土、その他は 6 号）	33
第11図	II 区窯跡平面図	34
第12図	II 区窯跡正面立面図	35
第13図	II 区出土十大形窯道具類実測図	36
第14図	II 区出土陶器実測図	37

1. 調査に至る経緯と経過

今回発掘調査を実施した布志名焼窯跡群は、島根県八束郡玉湯町布志名451-2他に所在し、一般国道9号を県都松江市から玉湯町へ約800mはいったところの通称若山と呼ばれている小丘陵に位置している。発掘調査は、ここに自動車専用道路の松江道路の終点として国道9号との連結工事が計画されたことによる。一般国道9号松江道路は、松江市街地の交通混雑緩和と中国横断自動車道尾道松江線に連結して山陰の高速交通ネットワークを確立するために、昭和47年都市計画決定され、平成3年までに八束郡東出雲町から松江市乃木福富町までが供用されていたもので、松江市乃木福富町から玉湯町布志名については、平成6~7年度に島根県埋蔵文化財調査センターで発掘調査を実施している。布志名焼窯跡については、平成7年9月に上記乃木福富町~玉湯町布志名間を発掘調査中、島根県文化財保護審議会委員の池田満雄氏から松江道路建設予定地内に窯跡が存在するらしいという情報がはいり、直ちに再調査を実施した結果、予定地内の2箇所に窯跡が存在している可能性が極めて高いことが判明した。これをもとに建設省と県文化財課で協議した結果、平成7年度中は布志名地区では工事を行わないでの、とにかく当初計画通りの調査を行い、平成8年度早々に確認調査を実施するということで意見の一致をみた。そして平成8年9月に至って建設省から連絡があり、同月19日バックホーを山の上にあげるために斜面に道を付けようと切り崩しはじめた途端、焼土と陶器製の焼き台が出土した。直ちに建設省と文化財課で調整会議がもたれ、不時発見という形で即座に調査を開始し、調査期間は約2週間ということで話がまとまった。

発掘調査は、出雲バイパスを調査中のパーティから一部調査員を派遣して9月24日から始まったが、蓋を開けてみると窯跡が2箇所ある上、一箇所は次から次へと下層の窯跡が発見され、最終的に調査が完了したのは10月31日であった。

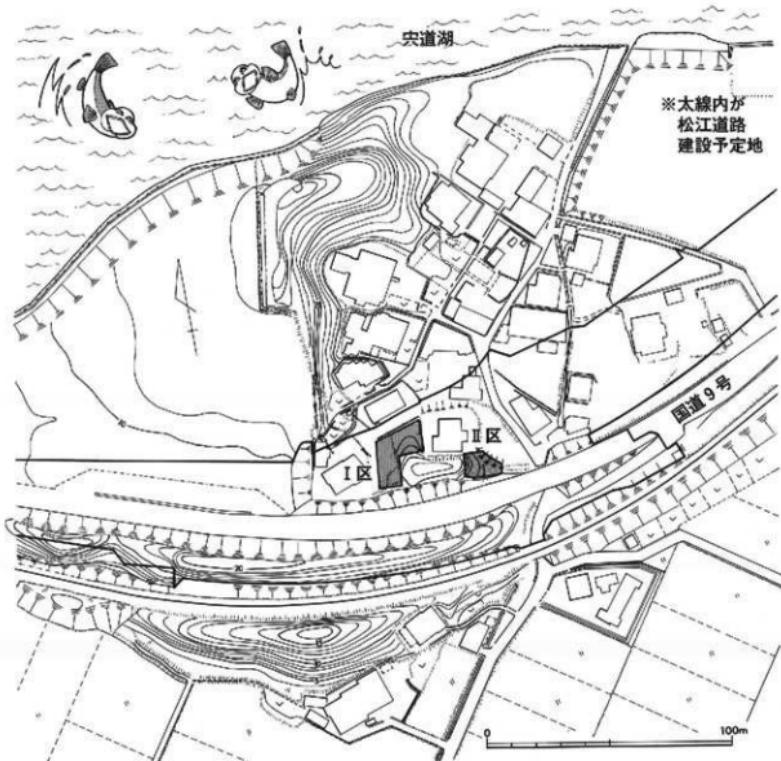


第1図 布志名焼窯跡群と周辺の遺跡

2. 位置と環境

今回の調査対象地となった若山は、八束郡玉湯町布志名の集落がある沖積低地から宍道湖岸に独立して存在する丘陵で、この丘陵自体には布志名焼窯跡以外の遺跡は知られていない。布志名の沖積低地の南側には碧玉の産地として有名な花仙山があり、そのそそ野に古墳時代以降の玉作の工房跡や墳丘墓、古墳等が營まれている（第1図）。

布志名焼は、松平不昧公のもと黄釉を特色とした茶器類の製作で有名であるが、その他に天保年間以降に中心的に焼かれるようになった白釉や青白釉、鈴釉のぼてぼて茶碗、鉄絵などの製作でもよく知られている。布志名焼の創設に関しては、樂山焼の始祖倉崎権兵衛の弟子の加田半六の創始という説や、長門国から樂山焼にきた陶工与之助の弟子の利吉・平八の二人が布志名に窯を開いたという説もあるが、一般的には佐々木高綱の家臣船木与兵衛次村の23代の裔与兵衛村政が寛延3（1750）年に布志名に移り住み、実子3人とともに陶業に従事したのが始まりとされる。それ以

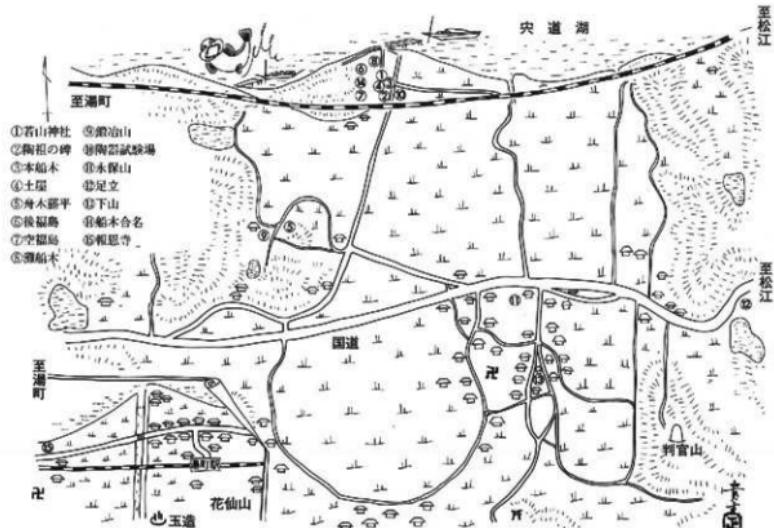


第2図 若山周辺と調査区の位置

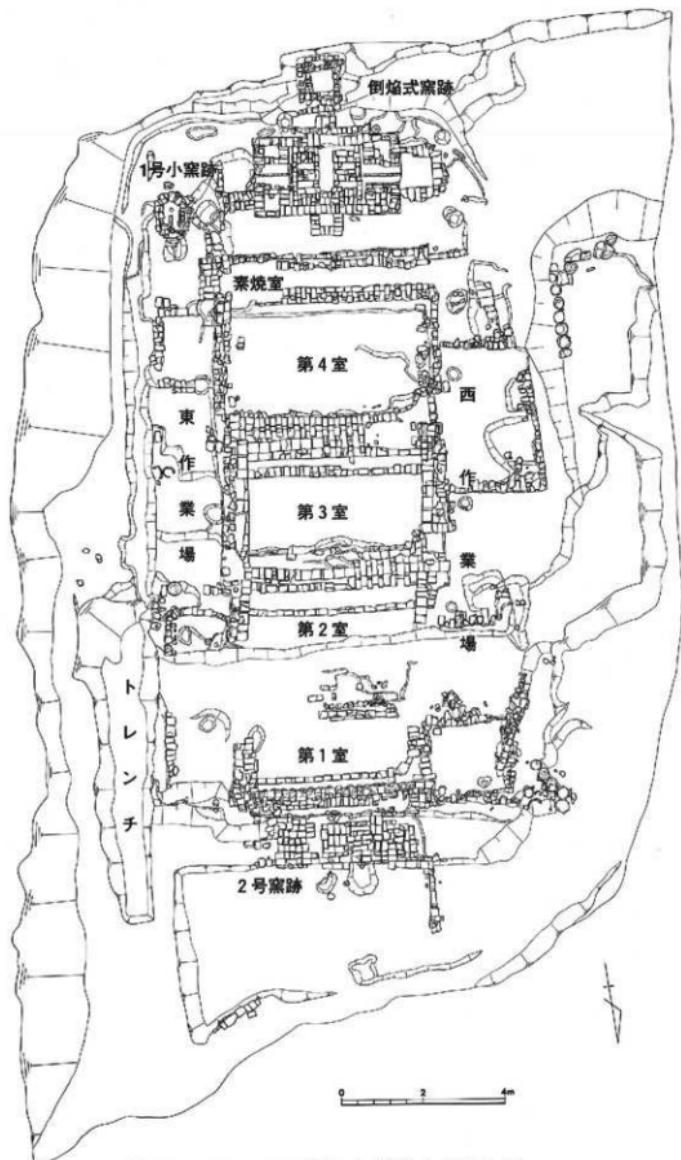
前には、布志名の地で粗悪な陶器が焼かれていたり、松江市との境に位置する大谷や松江市に入った内白町松本付近から採取される粘土を使って、松江市乃木福富町あたりでかわらけを焼いていたりしていたようである。これを証明するように、松江市すべりざこ古墳群（第1図17）の調査では、山の斜面から粘土の貯蔵穴も発見されている。さて、船木村政の長男村直は船木家を繼ぎ、次男嘉助は松江の沢家を相続した後、布志名に戻ってやはり陶業を始め、三男新蔵標吉も分家して陶業を始めたという。松平不昧公の治世にはその他に御用窯の土屋善四郎窯、永原与藏窯もあり、船木家からはさらに分家も興って、慶応年間までに12窯が開かれている。これらの窯元はいずれも若山周辺に窯を構えて創業していたが、明治時代に至ると若山以外にも、銀治山窯、永保山窯、昇雲焼（足立窯）が開窯している（第3図）。明治時代の布志名焼は船木家系窯を中心として、共同窯を組織したり、合名会社を作ったりして生産や販売の強化を図ったが、大正時代以降、徐々に廃業に追い込まれていき、現在は灘船木窯の船木研児窯、雲善窯、湯町窯の3窯が残るのみである。

3. 調査の概要

発掘調査はまず、窯跡と判明した若山東斜面のほかにもう1箇所要注意個所と認識していた場所に、窯跡が存在していないかどうか確かめることからはじめた。対象地は国道9号脇の山の西斜面で、現状は竹やぶと畠であるが、当初から第3図⑦の空福島窯の窯本体か工場があるかもしれないと踏んだところである。重機で表土を採ったところ、竹やぶの下にはんど窯跡1基がまるまる残っていることが判明した。よって、第3図や地元の聞き込み調査をもとに、この部分をI区（空福島窯跡）、先の東側斜面をII区（本船木窯跡）として、同時に調査を開始した（第2図）。



第3図 明治末期の布志名焼窯元（「島根の陶窯」から複製）



第4図 I区1・2号窯跡および倒焰式窯跡平面図

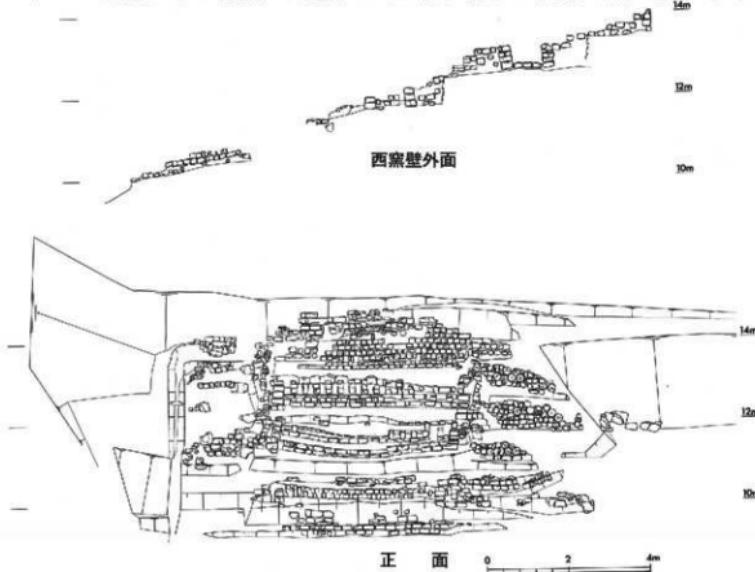
II区は遺存状況の極めて悪い窯跡1基のみであったが、I区は連房式登り窯の1号窯跡と煙道部を壊して作った西洋式の倒焰窯跡、その隣に素焼き専用の小窯、大口部分には1号よりも前の段階の大口（2号窯）を検出し、さらにその下層に連房式の3～6号窯跡と二つの小窯を発見した。

(1) I区

1号窯跡（第4図） 連房式の登り窯であるが、大口と煙道部分はすでに壊されていて残っていない。また、第1室と第2室の境目付近も東西方向の道で大きく壊されているが、房数は4室である。

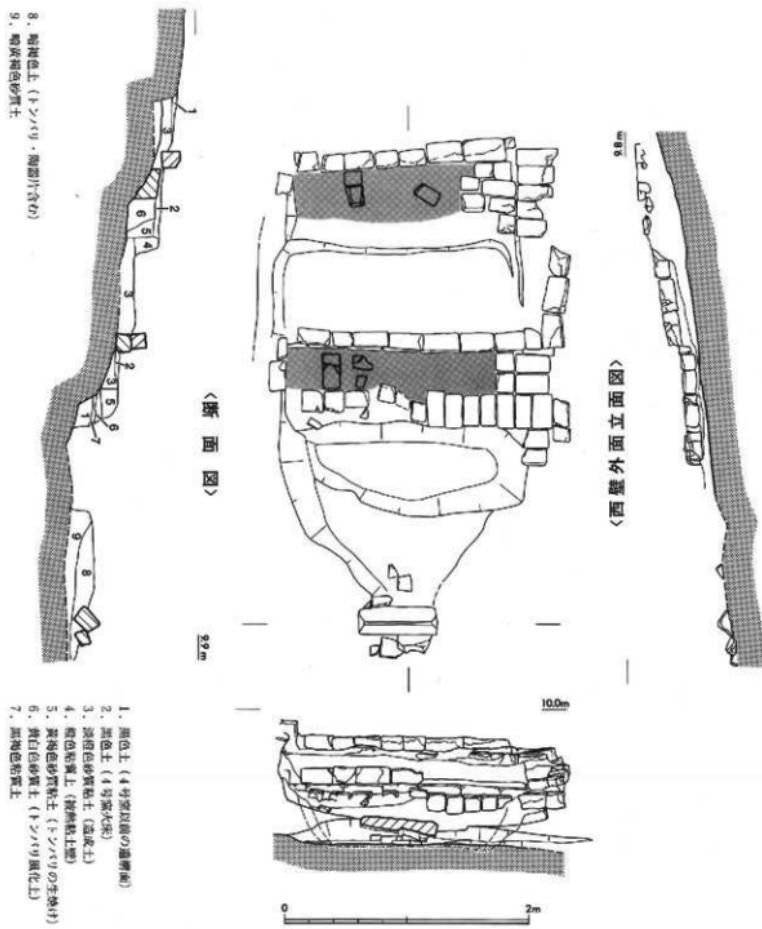
現存長は15.9m、各室の内法の幅は約4.5mである（第4図）。各室の大口側には幅20cmまたは40cmの火床があり、傾斜をもった床面には厚いところで厚さ10cm程度に砂が敷き詰められている。各室の両外には房の数と同じだけの作業場が築かれており、各作業場は高さ70～80cmの段差がついている（第5図）。また、作業場の窯壁側の奥には覆い屋根の柱穴が掘り込まれている（第7図1号窯跡完掘図）。東西両作業場からは窯道具が窯廃絶當時のままの状態で多数出土した。2号窯跡は1号大口付近の下層で発見したもので、1房分しか残っていなかった。房の規模は1号とはほぼ同様と考えられ、比較的短期間のうちに作り替えたものと推定される。

3号窯跡（第7図） 1号窯跡の東側で検出したやや小形の登り窯で、2房分と煙出し部分が残っていた。窯跡の主軸は1号窯跡よりも東西にやや振れており、煙出し周辺などのスペースを確保するため、南側の山をきれいに切削している。窯の東西両壁の基礎とその外側に作業場も若干検出されたが、東側は大きく落ち込んで、その中に多量の欠陥品が埋め込まれており、この部分は途中で掘り下げることを断念した。3号窯跡は6号窯跡とともに今回の調査では最も古い段階の窯跡である。

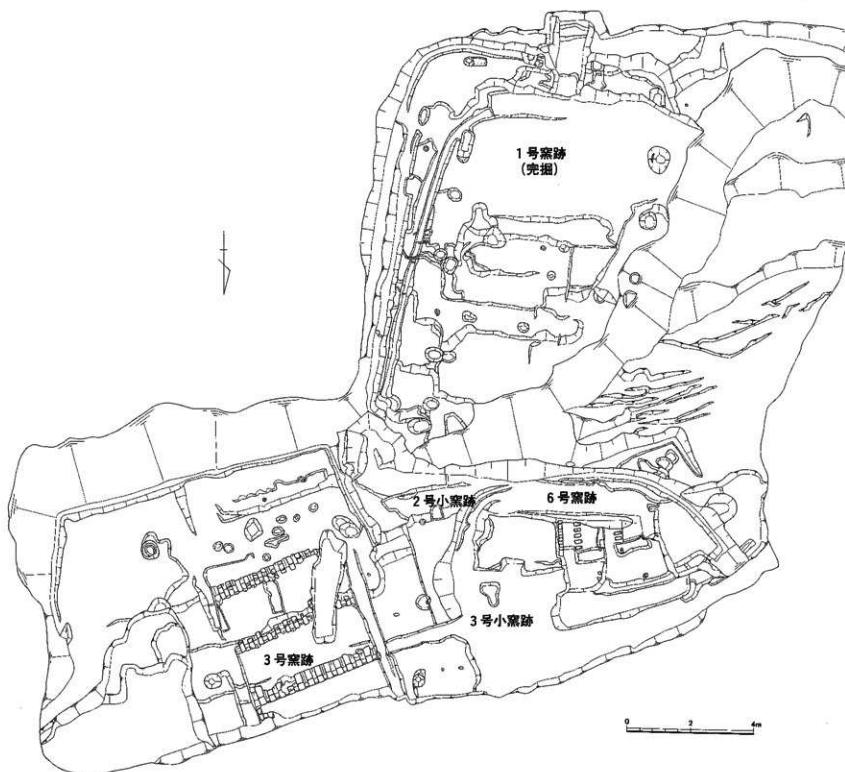


第5図 I区1・2号窯跡正面立面図および1号窯跡西窯壁外面立面図

4号窯跡（第6図） 4号窯跡は3号窯跡の上に作られた小形の窯跡で、軸方向は3号窯よりも1号窯のはうに近い。現存長8.4m、幅4.6mで、部屋は2房と考えられる。各室の火床と焼成床面との段差はほとんどなく、火床は粉炭が多量に混じって黒色を呈しており、焼成部の床面にはやはり砂が厚く敷かれている。砂や火床の中から羽釜や徳利などのおもちゃや、七福神などの型押しの土人形などが多数出土している。大口部分は地面を若干掘り窪められているが、燃焼による焼け土や炭化物は残っていない。なお、4号窯跡の上からは主軸がほぼ東西に向いた5号窯跡を検出したが、火床と火格子の一部だけで、その他はすべて破壊されていた。



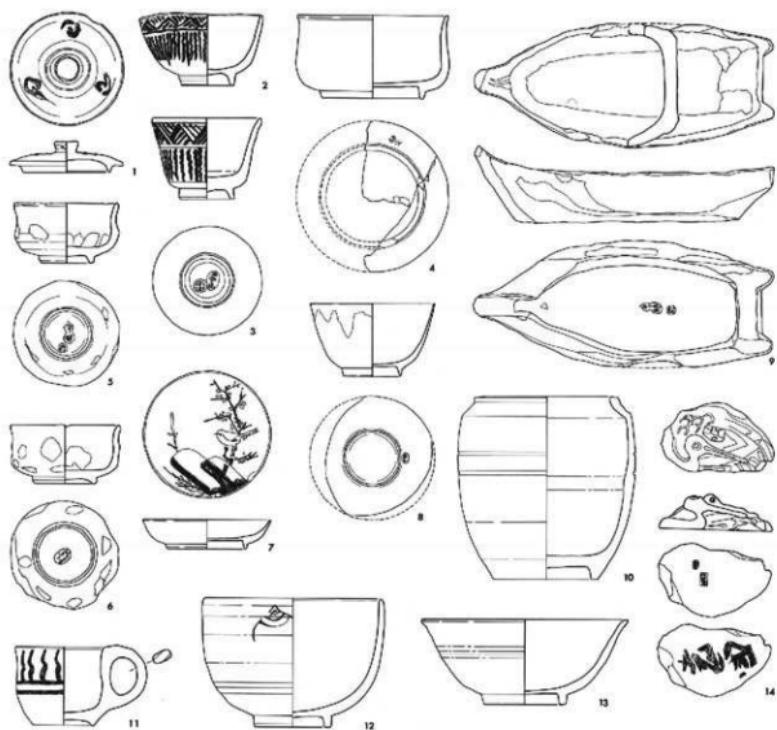
第6図 I区4号窯跡実測図



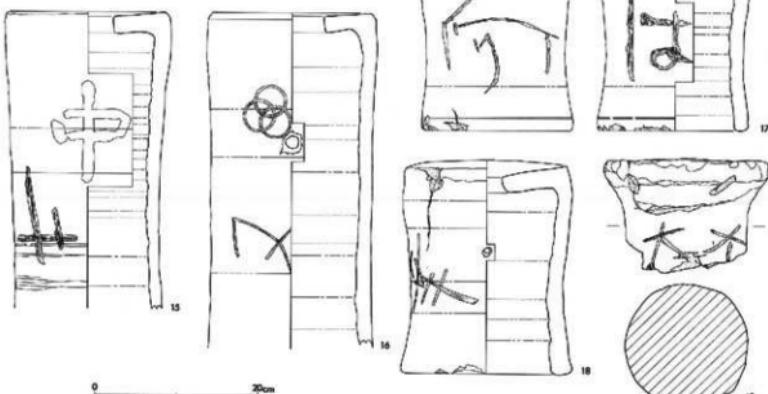
第7図 I区下層窯跡実測図



第8図 1区1号窯跡東作業場および窯内出土陶器

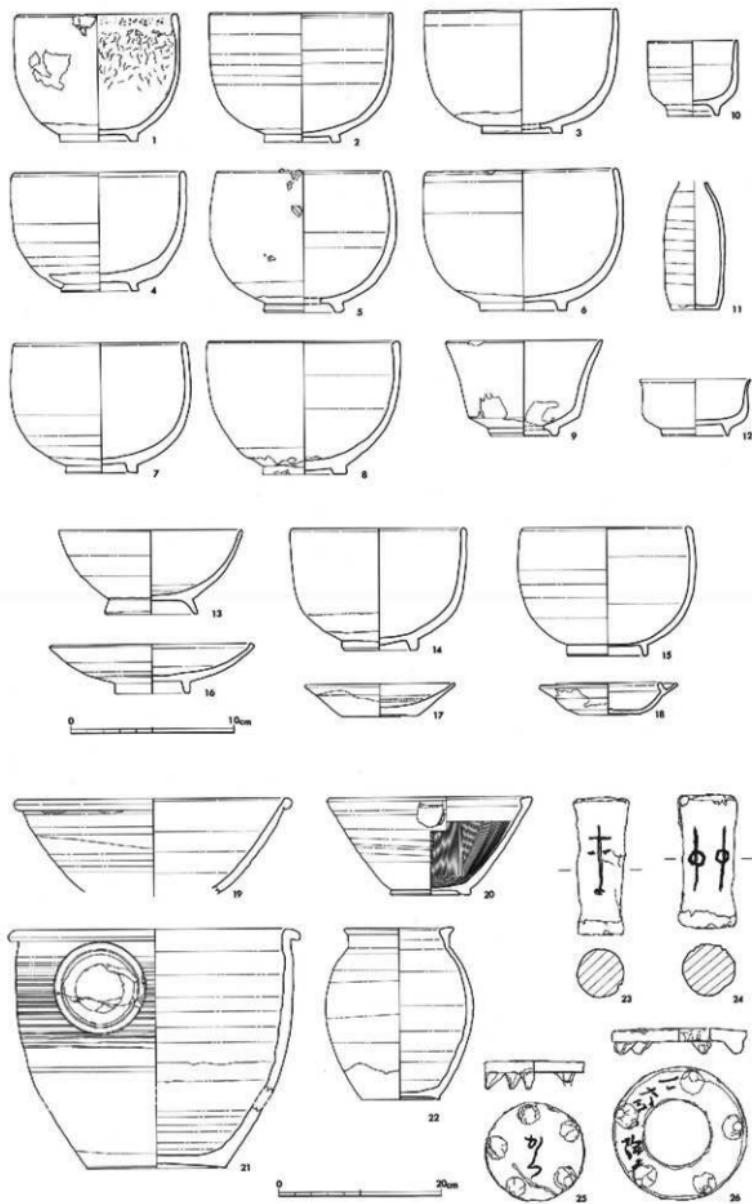


0 10cm



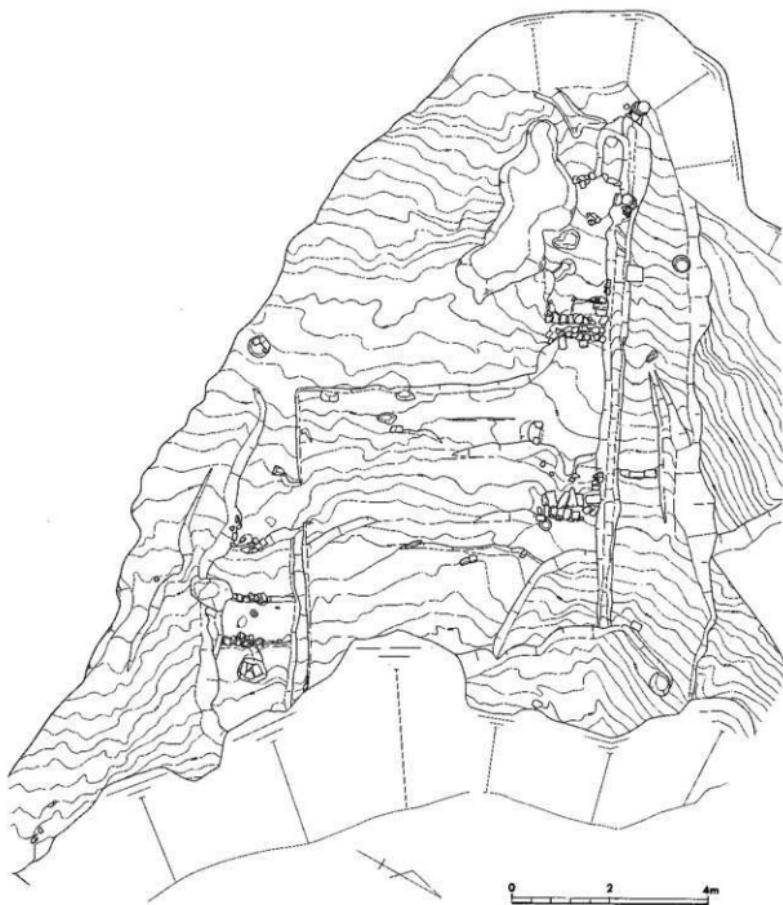
0 20cm

第9図 I区1号窯跡西作業場および西作業場壁内出土陶器類 (15~19が壁内出土)



第10図 I区 5・6号窯跡埋め土出土陶器類 (1~12: 5号埋め土、その他は6号)

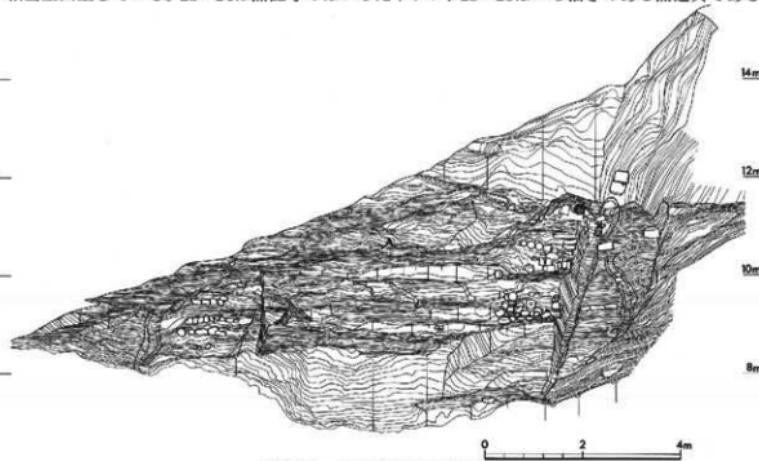
6号窯跡（第7図） 1号窯跡の入口から第1室あたりの下から検出した小形の窯跡で、軸方向はほぼ東西に向いている。東側と南側の斜面を大きく削り取り、半円弧状に深い溝を廻らせて排水施設としており、北側片面にだけ作業場があったものと推定される。燃焼室から第1焼成室との間に1m近い大きな段があり、トンبارリや壁は基礎の一段分しか残っていない。焼成室は2室ないし3室と考えられるが、室内からは遺物は出土していない。作業段の煙道に近いところで平面瓢箪形で中央部の窪みが焼けた3号小窯を検出している。



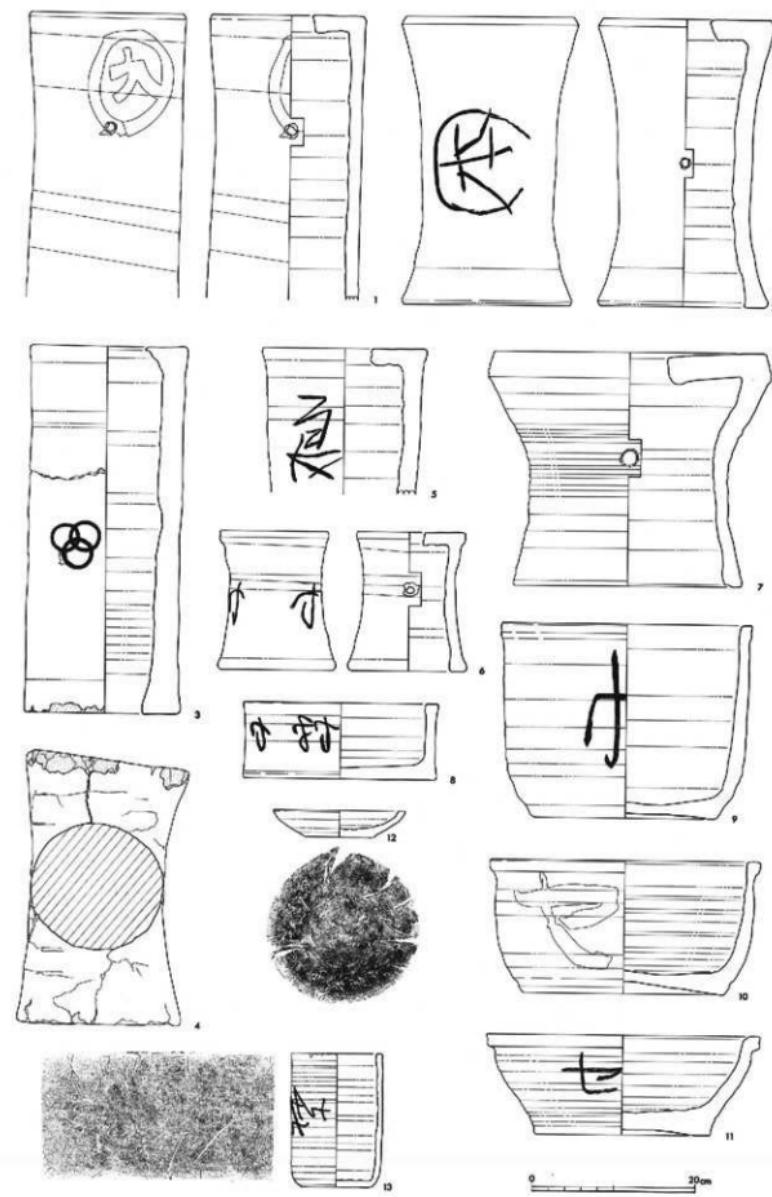
第11図 II区窯跡平面図

出土遺物（第8～10図） 現在も土屋家に伝わる不昧公時代の下絵集には、抹茶茶碗や水指、花生のほか、香合、風炉、唐津写皿（菓子器）、振り出、炮烙、茶入れ、向付、砂鉢、小皿など相当な数の品物が描かれているというが、出土遺物もいろいろな種類のものがある。第8図は1号窯跡東作業場と窯内から出土したもので、1～9は湯呑み茶碗または急須の蓋で、つまみが欠けたものが多い。10・11は浅い茶碗で、22・24は若干深くなったもの、12～17は円筒形の深いもので、23は腰が丸くなつたものである。19・20は小鉢、21は鉢である。素焼き段階のものも多いが、色調は黄釉で、22には口縁から緑釉が垂れる。図柄は蓋に竹に鶯や、鶴、身のほうには桜や牡丹、梅といった季節を題材にしたもののが目につく。29は草花文花器、26・27は神社のかわらけである。第9図は西側の作業場からの出土品で、茶碗類にはぐい飲み風のもの（2～6）もある。9は舟形の盛皿様のもので、11はコーヒーカップ、10は鉢である。湯呑みや小鉢の高台付近には窯印の判が打たれており、「イズモカネモリ」、「出雲焼」、「雲葉」、「出七ニ」、「若山」、「双柳窯」などがある。15～19は作業場の壁を構成している大形の焼き台類で、1号窯跡創建以前に使用されていたものである。15は白釉の「中」にヘラ描きの「サ」、16は三つ輪のスタンプにヘラ描き「又」、17はヘラ描きの「向」に「は」、18は「幸」、19は「大」がふたつである。布志名焼関係の書物から窯元諸家系図を紐解いてみると、15から順番に中沢（家）、福島又兵衛、向う沢（家）、福島幸助、船木浅太郎という氏名が浮かんでくる。福島幸助を除いていずれも明治時代前半期に活躍した陶工たちである。

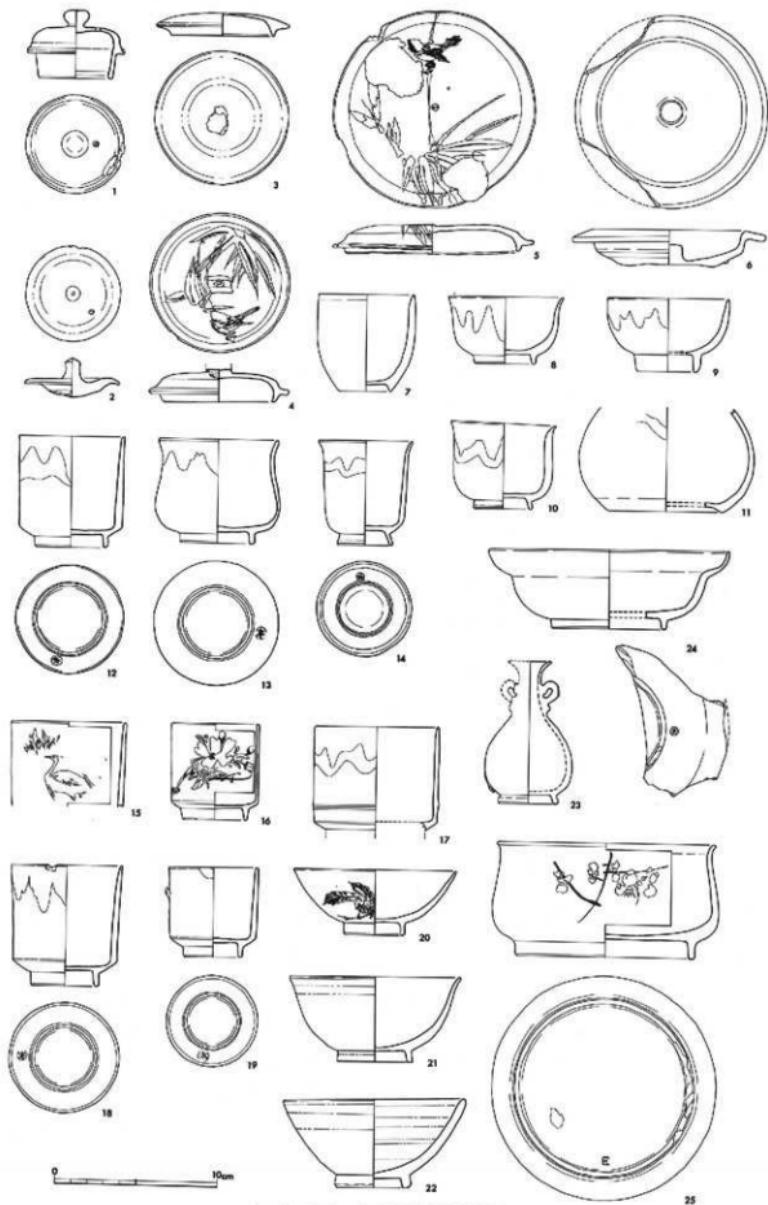
第10図は5号及び6号窯跡に埋められた欠損品の中で比較的遺存状態がよかつたものである。いずれも明治以前の製品と考えられるもので、1～8・14・15はいわゆるぼてぼて茶碗といわれるものである。器高は15～20cmと比較的丈の高いものが多く、口縁径も20～22cmと広いものが多い。見込みは若干窪んで、丸い腰から口縁が直立ないしやや内傾するという特徴がある。釉は白釉か青白釉、または船釉で、高台までは釉薬はかかるない。13は通常の碗、16は皿で、18は灰皿と思しきものである。また、粗製ながら捏ね鉢（19）や擂り鉢（20）、壺形陶器（21・22）も相当量出土している。23・24は窯記号のはいったトチン、25・26はへら描きのある窯道具である。



第12図 II区窯跡正面立面図



第13図 II区出土大形窯道具類実測図



第14図 II区出土陶器実測図

(2) II区

2区の窯跡は1基のみ(第11・12図)である。遺存状態はかなり悪く、窯壁やトンバリはほとんど残っていない。少なくとも3房以上あったと考えられ、遺存状態が一番よい調査区中央付近には北側の2段の作業場に対応するように、各房の火床が約50cmの幅で観察される。房の幅は約4.5mである。北側作業場はそれぞれが約1mの段差をもっているが、南側のそれは段差が小さく、段の数も多い。北側作業場の北側には一段低い通路があり、この面がこの調査区の一番古い面のようで、現存する作業場自体はそれ以前にあった地山面に盛り土して改築したものである。煙出し部分も欠損しているが、北側には高さ4mにも及ぶ壁面が立ちはだかっており、ここでも後ろ側に余分なスペースはなさそうである。遺物は窯内の床面付近で出土するものもあったが、大半は北側の通路部分を埋める形で廃棄された欠陥品と、作業場や通路に放置された窯道具類である。

第13図は大形の焼き台と匣鉢類で、1～3・5～7は円筒形、4は円柱形のものである。窯印には「㊣」、「㊤」、三ツ輪、「良」、「七」、「喜」などがある。匣鉢は製品に茶碗類などの小物が多い関係で、8や12のような浅いものが多く、9～11のような大形品は少ない。12の外面には「製陶社長高木君与り」というハラ描きが観察されるが、この製陶社とは、明治28年から明治35年ころまで組織されていた会社である。13には沢喜三郎を示す「沢」と「喜」の二字が彫られている。第14図はII区の窯跡で焼かれた製品類である。茶碗や急須をはじめ、小鉢や皿などが多く見受けられる。釉はやや濃い黄釉で、煎茶茶碗には口縁から緑釉が下がるものが多い。色絵には竹(籠)に雀、鶯、梅、桜などがある。6は青地釉の土瓶の蓋と推定される。茶碗の底部に打たれている窯印はいずれも「㊣」であるが、25の鉢の底面にはアルファベットの「E」が打たれている。

4. 終わりに

今回の布志名焼窯跡群の調査では、I区で構造のわかるものとして大形の連房式登り窯1基と、倒焰式窯跡1基、小形の連房式登り窯3基、煉瓦積小窯1基、窯の残欠として連房式登り窯2基、小窯2基を発見し、II区では大形の連房式登り窯の残欠1基を確認した。わずか1ヶ月半の間の調査のため、十分な観察や記録が採れなかったという反省点はあるが、布志名焼の総本山とも言うべき若山の地で発掘調査を実施することができたのは大きな成果であったといえる。I区1号窯跡は、空福島窯という理解で調査に入ったが、窯印にいろいろな種類があり、作業場の壁には明治時代前半期の窯元が使っていた窯道具類が組み込まれていることがわかった。また、煙出し部で発見された倒焰式窯跡は大正時代に布志名に導入されたといわれており、その伝承通り大正末期以降に使われたという灘船木の双柳窯の印刻も出土している。以上の諸点を総合すると、1号窯跡は明治20年代から30年代にかけての沢家や福島家、灘船木家による共同窯及び製陶社時代の登り窯と考えられ、II区はほぼ同じ頃の本船木家(良右衛門)の窯と考えられる。I区3～6号窯跡については今のところ窯元を特定できないが、前述したように白釉や青白釉のぼてぼて茶碗の出土から江戸時代まで遡ることは間違いない。今回報告した資料は発掘調査で持ち帰った資料のごく一部である。できれば、今後も引き続き資料整理を行い、さらに詳しい検討を加える必要がある。



1. I区1・2号
窯跡全景
(東から)



2. 同正面
(北から)



3. I区倒焰式
窯跡及び1
号小窯跡



1. I 区 1号
小窯跡
(北から)



2. I 区 4号窯
跡 (北から)



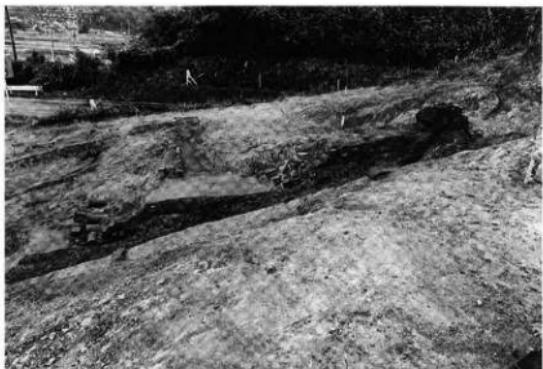
3. I 区 3号窯
跡 (西から)



1. I区6号窯
跡(西から)



2. II区窯跡
全景
(東から)



3. 同
(北から)



1. II区窯跡出土陶器及び窯道具類



2. I区出土陶器類 (1号～6号窯跡)

報告書抄録

フリガナ	コクジラフンボグン							
書名	小久白墳墓群							
副書名	一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区XII							
卷次	12							
シリーズ名	一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	XII							
編著者名	足立克己 間野大丞 浅沼政誌							
編集機関	島根県教育庁文化財課 島根県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL 0852-36-8608(代)							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コ一ド	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			m ²		
小久白 墳墓群	島根県安来市 荒島町	322032		35°25'15"	133°12'12"	19980420- 19980528	260	道路建設
布志名焼 窯跡群 (空福島窯跡、 本船木窯跡)	島根県八束郡 玉湯町	323063		35°25'57"	133°02'03"	19960924- 19961031	510	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
小久白 墳墓群	祭祀跡	近世	石積遺構 道路遺構	カワラケ 古鏡 陶磁器 土製支脚	サエ(サイ)ノカミ信 仰に因る遺構			
布志名焼 窯跡群 (空福島窯跡、 本船木窯跡)	生産遺跡	近世 近代	連房式登り窯 倒焰式窯跡 煉瓦積小窯 小窯	7 1 1 2	窯道具 茶碗 急須 上瓶 鉢 花生 擂鉢 こね鉢、灰皿			

小久白墳墓群

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区

1999年3月発行

発行 建設省松江国道工事事務所

島根県教育委員会

編集 島根県埋蔵文化財調査センター

〒690-0131 島根県松江市打出町33 TEL0852-36-8608

印刷 柏木印刷株式会社